

巻 頭 言

論文に残すということの意義

副院長 中 村 進一郎

いよいよ2022年度が始まりました。2021年度はコロナに始まり夏冬のオリンピックを経てコロナに終わった1年でした。学会や研究会はオンラインやハイブリッドが標準開催形式となり、現地開催のみというのは珍しい状況が続いています。

このような中でも当院において日常診療はほとんど変わることなく継続されており、治療困難な症例や高度な治療を要する症例、看護で工夫が必要な症例、そして多職種チームで乗り越えてきた事例など様々な経験が日々蓄積されていることと思います。

このようにして得られた経験や技術、知識は共有されなければ宝の持ち腐れになってしまいます。学会や研究会で発表する機会が減っているかも知れませんが、そうであればなおさら論文という形で残しておく意義は大きくなっていると感じます。

皆さんの中には論文を書くのが苦手な人がきつと思います。恥ずかしながら私もおそらくその内の一人なのでしょう。そんな私ですが、論文化する意義については認識しているつもりですので、ここに記しておきたいと思います。

論文化する意義は、一つは自分の仕事を客観的に見つめ直し、反省し、改良できることです。これは皆さんが日常業務で行っているPDCAサイクルそのものです。PDCAサイクルは1950年代に品質管理の父と言われるW・エドワーズ・デミングが提唱したフレームワークで、Plan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Action（改善）の頭文字をとったものです。このPDCAサイクルを強化することで業績：ここでは治療効果や患者さんの満足度、病院の評価などの向上が達成できる仕組みを作ることが出来ます。

論文化する意義の2つ目は、自分の仕事について他人の批判に耐えられる確かな成果を残すことです。論文の中で、同じ領域で過去に書かれた論文を引用し、比較し、利点と欠点を比較することで自分の仕事をより確かな成果として評価し、新たな視点を得ることも出来るでしょう。

そして最も大切なことは、自分の仕事を世界に、そして後世に伝えることです。論文作成は、この姫路赤十字病院で仕事をした証、医学の世界で自分が生きた証を刻むことです。この姫路赤十字病院誌は1977年創刊で今回第46巻となります。ここに記された論文は50年後、100年後も検索され、閲覧可能です。世界のTop Journalでなくてもいいのです。自分たちが得た貴重な経験、大切な情報、大事な教訓を職場内外の他人と共有することが肝要です。

最近学会等によく耳にするようになった「Take home message」という言葉が私は好きです。どんな事でもいいので当院で経験した事を皆で共有し、そしてお互いに学びを与え合う、このことが大切です。そういう場所としてこの紙面を使っていたきたいと切に願います。